

地域子育てネットワークだより平成26年11月号

☆☆☆

連載第112回 こどもの健康コラム

☆☆☆

ノーベル平和賞のマララさん

ことしのノーベル平和賞に、若者や子どもたちの権利を守る活動を続けているパキスタンの17歳の少女、マララ・ユスフザイさんが選ばれました。彼女は、10代前半だった頃に、女性の教育を否定し学校の爆破や脅迫を繰り返すイスラム過激派に対抗して、女性が教育を受ける権利を、ネットを通じて世界に向けて訴えました。そのため、イスラム過激派に狙われ、おとし10月、通学バスでの下校中、頭に銃弾を受けました。しかし、彼女は女性への教育なくして平和はあり得ないと訴え続けています。

我が国において男女の「教育の機会均等」が実現したのは、第二次世界大戦後です。戦後、日本が再び戦火に巻き込まれずにいるのは、教育を受けた女性が、はやる男性を抑え、平和を求め続けたからでしょう。

孫は来てよし、帰ってよし

共働き世帯が増加し、孫育ての祖父母が増えています。とくに、保育園に通いはじめの乳幼児は、毎月のように発熱し、保育園に行けずに、祖父母だよりになりがちです。

孫は、ほんとうに可愛いけれども、祖父母だけの孫育てとなると、もう体力的にも、精神的にも、祖父母にはかなりの重圧です。『孫は来てよし、帰ってよし』ということばがあるように、祖父母の本音は昔も、今も変わりません。ところが、『可愛い孫の面倒をみせてあげることが、親孝行』という考え違いをしている親世代、娘・息子世代もいるようです。祖父母は、自分の可愛い娘・息子が困っている姿を見るに忍びず、手助けしているのです。

子育ては、まず夫婦で力を合わせて、あるいは親が頑張る。そこに、強い親子の絆ができるのです。地域の支援、社会の支援をうまく活用し、祖父母の助けは最後の砦にしてくれると、祖父母は大助かりです。

平成26年敬老の日

孫は来てよし、帰ってよし

共働き世帯が増加し、孫育ての祖父母が増えています。とくに、保育園に通いはじめの乳幼児は、毎月のように発熱し、保育園に行けずに、祖父母だよりになりがちです。

孫は、ほんとうに可愛いけれども、祖父母だけの孫育てとなると、もう体力的にも、精神的にも、祖父母にはかなりの重圧です。『孫は来てよし、帰ってよし』ということばがあるように、祖父母の本音は昔も、今も変わりません。ところが、『可愛い孫の面倒をみせてあげることが、親孝行』という考え違いをしている親世代、娘・息子世代もいるようです。祖父母は、自分の可愛い娘・息子が困っている姿を見るに忍びず、手助けしているのです。

子育ては、まず夫婦で力を合わせて、あるいは親が頑張る。そこに、強い親子の絆ができるのです。地域の支援、社会の支援をうまく活用し、祖父母の助けは最後の砦にしてくれると、祖父母は大助かりです。

平成26年敬老の日

育児のバトンタッチ

新しく京都大学の総長になられた山極寿一先生から、ゴリラ社会での子育ての話
を聞く機会がありました。ゴリラの赤ちゃんは2キログラム足らずの体重で生まれ、3年間は
お乳だけで育てられます。

ゴリラの赤ちゃんは、絶えず母親がそばにいますので、泣くことはないそうです。ゴリ
ラの母親は、我が子がお乳以外のものを食べるようになると、子どもを抱えて父親の
前に行き、座らせ、そっと離れていきます。子どもは、父親中心の家族の一員となりま
す。母親から父親への育児のバトンタッチが見事に行われるそうです。

人の赤ちゃんはよく泣きます。いろいろな人に抱かれ、いろいろな人の手で育てられる
ので、いろいろな人とコミュニケーションをとろうとよく泣きます。泣くだけでなく、生まれ
て間もなくから誰にでも笑顔を振りまき、まわりの関心を集めようとしています。

どうやら、ゴリラの子に比べて、進化した人間の子どもの方は、乳児期から不安な
日々を過ごしているのかもしれない。

何でも口に入れる子どもたち

0歳を除く子どもの死因の第1位は「不慮の事故」です。残念ながら、長年にわたりこの傾向は変わっていません。日本小児科学会では、重症度が高い傷害を繰り返さないために事例集を出しています。その中から、2、3紹介します。

子どもは何でも口に入れます。0歳から3歳児にかけてみられるのが異物の誤嚥です。危険なのが2～3cm大のスーパーボール、木製の球、また巨峰ぶどうによる窒息で、呼吸困難となり、死に至った例があります。

子ども用の金属製の指輪やネックレス、イヤリングなどが「キッズアクセサリー」などとして、市場にあふれています。食品衛生法で乳幼児向けの小さな玩具については鉛、カドミウムなどの使用を規制していますが、装飾品は玩具とみなされず規制対象外となっています。米国で金属製ブレスレットを4歳児がのみ込み、その塗膜に高濃度の鉛が使われていたために、胃の中で長時間滞留し中毒死を招いた例もあります。

「不慮の事故」は他人事ではありません。子どもたちの明るい未来のためにも、防ぐことのできる「不慮の事故」を可能な限り防止することが大切です。

「あれ」、「これ」では通じない

この4月から神戸新聞朝刊に月1回、発達障害をもつ児のお母さん自身が、発達障害児の育て方を漫画つきでわかりやすく書いておられます。その内容は発達障害児だけでなく、一般の子育てにおいても当てはまるものであり、紹介させていただきます。

発達障害児は「あれ」、「これ」といった代名詞の理解が、とくに苦手なようです。だから、少していねいにももの名前で話すとか、指差しをすれば、当人を悩ませなくて済み、コミュニケーションもうまくとれるようです。

私自身も妻から、「あれ」、「これ」と指図を受け、とんちんかんなものをもって渡すと彼女は不機嫌になります。指差しをした方向をよくみていないからだと言いますが、私が振り向いたときには、もう指差しは終わったあとです。友人同士でも同じです。「あれ」、「これ」と言ったり、指差しをするときには、相手がよく理解できているか、相手の目を見ながら、お互い確認しながらにしたいものです。

「麻疹パンデミック」再来の恐れも

麻疹(はしか)は、日本において 2007 年に、10～20 代を中心とした大流行を記録し、大学においては休講騒ぎがあったことをご記憶の人も多いでしょう。国立感染症研究所では、麻疹患者数が今年に入ってから4月9日までに 253 人となり、昨年1年間の患者数をすでに上回っており、「麻疹パンデミック(大流行)」再来の恐れも出てきたと警告しています。麻疹は、年齢にかかわらず命に関わる重篤な感染症です。しかし、予防接種をすれば予防可能な疾患です。

平成 18 年の予防接種法一部改正により、麻疹ワクチンの接種は、第 1 期と第 2 期の 2 回接種となり、いずれも無料で受けることができます。第1期は1歳から2歳になるまでの間に、第2期は5歳から6歳の間に(就学前の1年間のできるだけ早い時期に)接種するように勧告されています。

今回の流行では、幼児にも多くみられることから、第2期の接種可能年齢になれば、できるだけ早い時期にワクチンを接種し、免疫力を高めて下さい。

子どものチャレンジを見守る

子どもは、大人に比べてはるかにチャレンジ心に富んでいます。遊びでも、スマホでも、必死にできるようになろうと努力している姿は真剣そのものです。チャレンジには、失敗がつきものです。99回失敗しても、百回目にやっと成功できた喜びは、それが些細なことであっても、本人には掛け替えのないすばらしい経験になります。大人が横から、「もっとこうしてみては」と余計な口出しをしないからできた幼少時の成功体験は、成人してからの社会生活に必ず役立ちます。

繰り返す失敗は、遊びや学習だからできたことで、子どもの特権です。実社会に出てからは、ひとつひとつの失敗に説明がもとめられ、つまらない失敗ばかりを繰り返していると、学習能力のない、役立たず者として排除されていくことでしょう。

子どもの命を脅かす危険性がなければ、子どものチャレンジを見て見ぬ振りをしながら、我慢強く思い止まることです。

スマートフォンと子どもたち

スマートフォンやタブレットなどが急速に普及する中で、端末で遊ぶ乳幼児が増えており、多くの保護者が不安や疑問を抱いておられます。

いまや、乳幼児向けのアプリを開発している企業自らが、乳幼児の適切なスマートデバイス利用に関するガイドラインを出さざるを得ない状況となり、「使う時は親子で会話しながら」「保護者がスマホを子守代わりにしない」、などと注意を呼び掛けています。

子どもたちは、スマホを通じて多様な体験ができるから興味を抱くのです。直接体験や絵本や玩具などとバランスよく組み合わせることにより、創造的な活動や、多様な体験ができる機会にもなります。スマホを取り上げるだけでなく、子どもの興味関心を捉え、好奇心を膨らませていくようなアプリ選びを通じて、人と人との信頼関係、コミュニケーション能力を体得する機会とする前向きな取り組みも必要でしょう。

一番深刻なのは、子どもからの話しかけを無視して、親がスマホに夢中になっていることです。

「いただきます」と「ごちそうさま」

昨年12月に「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録され、日本食が見直されています。和食は、新鮮で多彩な食材と持ち味を尊重した料理で、日本人は、元々、自然を尊重する民族であったことがわかります。

日本の食事のあいさつには、「いただきます」、「ごちそうさま」という2つの素晴らしい言葉があります。「いただきます」は、「私の命のために動植物の命を頂きます」ということであり、「多くの生き物を犠牲にして生きている」こと、大自然への感謝の気持ちを表したものです。

もう1つの「ごちそうさま(ご馳走さま)」の「馳」・「走」は、ともに「はしる」の意味です。昔は客人を迎えるのに走り回って獲物をとってきてもてなしたことから、そんな命がけの働きに客人が「有難う」と心からの感謝の気持ちを表したものだそうです。

「いただきます」、「ごちそうさま」という感謝を表すあいさつを、毎食時に重ねていくなかで、日本人としてのこころが子どもたちに宿っていくのです。

ほどよい子育てのすすめ

1歳半頃になると、子どもは自我に目覚め、激しい”あまえ”の世界に入ります。1日に何回かは、”あまえ”があまりに度が過ぎ、「もうこんな子はいらない」と思うほどキレてしまいそうになるかもしれません。そのようなときに、「出て行け！」とか、「お母さんの子ではない！」といった切り捨てる言動ではなく、「お母さんの大切な子だから、やめなさい！」と、抱きしめながら子の行動を制止してください。すごく怒ったときには、怒ったあと普段よりも優しく接することが大切です。すると、子どもは、「怒ったお母さんは怖い、でも、怒っても優しい、お母さん大好き。」ということになり、親と子どもとの間により強い心の響き合いができ、しつけにもなります。

何事にも理想的で、完璧であろうと一生懸命に子育てする母親よりも、我が子のあまえを楽しみながらほどよく子に接している母親の方に、より強い親子の絆が生まれ、子どもはうまく母親から巣立っていきます。